

2014.7.26 福島県大会決勝戦

日大東北	020	011	110	00	6
聖光学園	100	001	004	01x	7

(日) 大和田一遠藤拓
(聖) 今泉、船迫、梅田、佐藤真一高野、佐藤部
[本] 大和田 (日)

日大東北は大和田の一発などで9回までに4点をリード。しかし9回裏二死一、三塁から聖光学園が3連打の驚異的な粘りを見せて同点に。迎えた延長11回裏、無死一、二塁から柳沼がサヨナラ二塁打。サヨナラ勝利で聖光学園が8年連続甲子園出場を決め、一方の日大東北は2年連続で準優勝。チームは17安打を放ち、あとアウト1つのところまで行きながら、最後に勝ち切れなかった。聖光学園の素晴らしい粘りの一方で、日大東北としては最後に勝ち切るための精神力の強化が課題となった。

ドで臨んだ大会でもありましたから、決勝で聖光学園さんと当たることも十分に想定していました。

そして実際、決勝の試合もウチが主導権を握ることができていたのにもかかわらず、最後はあのような結果になってしまった。なぜ、9回にあの点差(4点)を守り切れなかったのか……。私の監督としての力量不足を強く痛感するとともに、チームとしては同点にされた時点で精神的に追い詰められてしまったことが、延長戦に入ってから勝てなかった敗因ではないかと感じています。

いきなり9連戦の実戦

そのような経緯を踏まえて、新チームは休養日を1日だけ取ってからスタートを切りました。私自身が気持ちの切り替えをするのにどうしても1日が欲しかったというのが正直なところでしたが、新チームの始動においてポイントに考えたのは「我慢強さ」とは何だろうか——ということでした。

そもそも野球では、我慢しなければいけないことがたくさんあります。日々の生活や練習だけでなく、試合でもグッと我慢して耐えなければならぬ場面というのは必ずありますよね。相手に流れが行きかけていると感じた時。無死満塁といったピンチの時。少しでも気を抜けばズルズルと行ってしまいそうな

場面でも決して集中を切らさずに0点、もしくは最少失点に抑えられるような我慢強さをチームとして身につけられないだろうか——。つまりこれは、精神面の強化にも通じることだと思います。

では、その我慢強さとはどこから生まれてくるのかと考えてみたとき、ひと昔の高校野球のような、ひたすら選手たちを厳しく追い込んでいく指導をするのかと言えば違います。体の痛みとともに覚えていくという時代ではありません。しかし、今のウチのレベルでは、例えば単調な同じ練習を何時間も真剣に続けられる根気があるのかと考えると、それもまた効果的とは思えません。

そこで私は、新チーム開始の4日目からあえて9連戦の実戦(練習試合)を組んでみました。旧チームでベンチ入りしていた2年生は守備要員でしたから、ある程度の守りはイメージできましたが、やはり3日間の練習だけでは動きもチグハグで、こちらの予想どおり打てない・走れないという状況でした。

それでも、試合を重ねていく中で少しずつですが自分で動けるようになってくる。この場面やらなければいけないことは何か、投手の癖や相手

の間はどこにあるのか、といったことを自分たちで探すようになる。よく「心技体」と言いますが、それとともに野球における「知(智)」の部分を意識して大切にしていくことで、我慢すべきことや場面などを選手たちが感じ取っていってくればと考えていますね。

それに旧チームには、大和田という大黒柱がいましたが、新チームには彼のように注目される選手はいません。むしろ、今年の聖光学園さんが甲子園で見たようなあの全員野球をウチもしっかりと実践していかなければならない。

まあ……。県大会の決勝で負けたあとに、「周りからは今年の日大東北は『大和田のチームだ』と言われてきたけど、やっぱり選手全員のチームだったよな?」と声を掛けると、大和田本人は大粒の涙をポロポロと流しながら「はい……」と、うなずいていました。そんなところも新チームがしっかりと受け止めていかなければならないと思いますし、スター不在だからこそ、チームとしてはもっと強くなれる可能性があるのではないかと感じています。

ちなみに新チームでは、練習試合で1試合10安打を目標に設定し、選手たちは10本に届かなかった本数×200スイングを自分たちに課すことを決めました。前回の試合は3安打でしたから「7×200」の1400本の素振りを追加メニューとして皆でしていましたよ。



「青春ここにあり... 球道即人道」。PL学園を率いた中村順司監督が好んで使った言葉。そんな名將が、父であり恩師でもある中村猛安監督にとってもこの言葉の意味は大きいという



新チーム始動から、可能な限りの実戦をこなしていくことで自分たちに足りない部分を探していく。1球の重み、アウト1つの重みを試合の中で感じて取っていく



全国クラスの実力を誇る同校の硬式テニス部からテニスボールのおさがりをもらい、打撃練習に使用。特に室内の練習では重宝するという。ソフトボールや水を含み重くなった球なども打ち込むことで打撃力を養う

求められる自主性

日々の練習についてですが、まず現在は2学年で80名ほどの選手がいます。福島県は広いですし、もちろん県外から入学してくる生徒もあり、約半数が寮生活をしています。基本的に選手たちのほとんどが進学しますので、部活動よりも学業優先というのが学校の考え方。ですから、勉強に力を入れながら野球でも結果を出せるチームを目指して日々取り組んでいます。

また、学校には専用グラウンドと室内練習場があります。平日は授業によって16時過ぎ、もしくは17時過ぎからスタートし、照明設備もあるので暗くなっても練習できますが、寮の食事が20時30分と決まっていますのでそれに間に合うようにチーム練習は終わります。

ただ、私も今年から担任のクラスを持つようになり、練習開始から選手たちと一緒にやれるわけではありません。数名の外部コーチの方々に助けていただきながら指導していま

すが、コーチたちにも仕事があるので付きっきりというわけにはいきません。そこで問われるのは、やはり選手たちの自主性だと思います。監督やコーチに言われてやるのではなく、自分たちでうまくいってようなチームづくりが必要です。

例えば、大和田先輩はなぜ速い球が投げられるのか? あの先輩はどうして強い打球を打てるのか? そういう身近な先輩のいいところを学ぼうとする姿勢がチーム全体に出てきてほしい。実際、監督の言葉よりも先輩の姿のほうが、説得力があることもあるでしょう。これは技術的なことだけでなく野球に対する姿勢などを含めて、先輩たちのいいところは受け継いでいくということを新チームの始動時にしっかりと考えていかなければいけません。

そして、そういうところというのは、時代が変わっても昔から変わっていない高校野球のいい部分なのかなと私は思います。自分の高校時代(PL学園)を思い出してみても、中村順司監督(現:名古屋商科大監

督)に野球の1から10まですべてを教えてもらうのではなく、先輩方の姿や動きを見て自分たちで覚えていきました。先輩たちも監督に聞こえないくらいの声で「あの場面はこうするんだ、ああするんだ」と教えてくれましたね。

逆に、すべて監督の指示どおりに動き、いくら反復練習によってプレーの精度を高めたとしても、試合でその想定と少し違うケースになると対応できなくなるようでは意味がないのではないのでしょうか。日頃から自分で考え、感じながら練習することで、試合では機転を働かせて応用を利かしたプレーができるようになる。そして、これもやはり実戦をどれだけ経験するかで大きく変わってくる部分なのだと思います。

また、郡山市は雪も降りますから、冬は思い切りボールを握れないという時期があります。もちろん、グラウンドが使えるギリギリまでは実戦に近い練習はしますが、選手にとって冬はいわば長いトンネルです。ですから、そのような時期こそ、数値